雁屋遺跡発掘調査概要・V

大阪府教育委員会

2003年７月

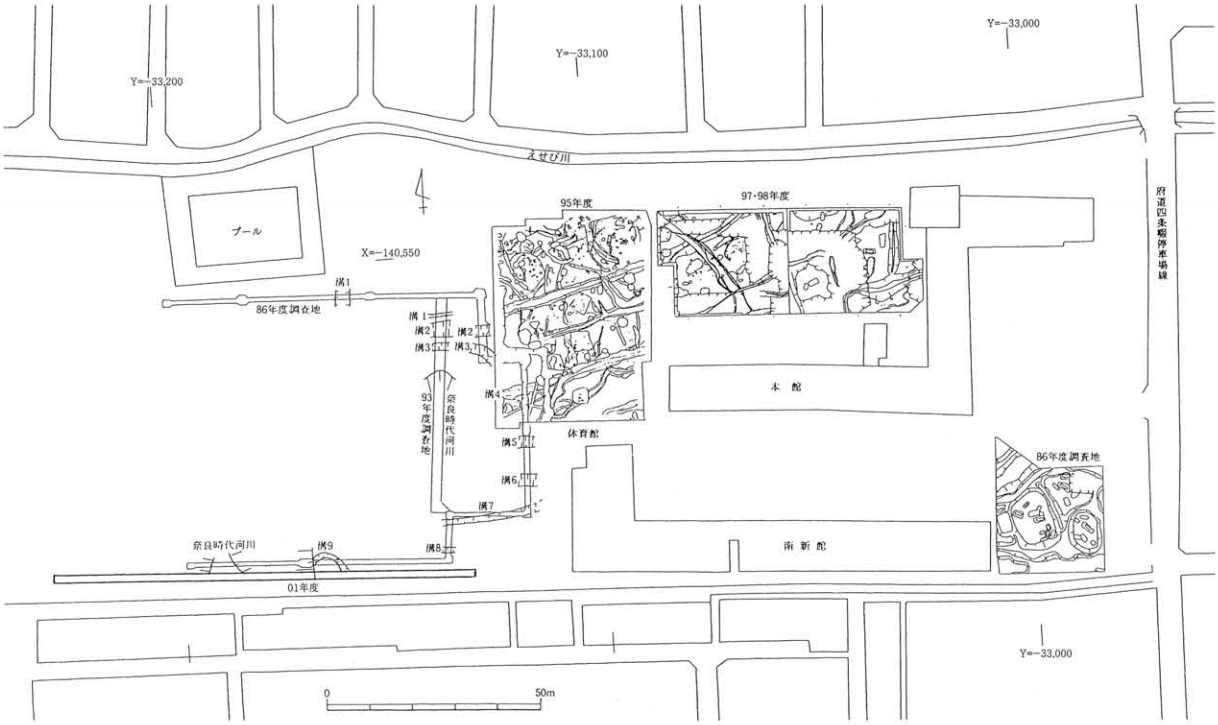
はじめに

雁屋遺跡は、四條畷市雁屋北町に所在します。1983年に遺跡が発見されて以来、本府教育委員会・四條畷市教育委員会によって数次にわたる調査が実施されてきました。

調査成果によりますと、本遺跡は弥生時代から中世までの複合遺跡であること、また弥生時代においては、前期から後期まで継続して存在し、北河内地域での拠点的な集落であることがわかっています。中期の方形周溝墓からは、人骨や木棺墓が検出され、後期の住居跡や多量の土器なども見つかっています。

今回の調査は、1986年度に実施された府立四条畷高等学校第Ⅱ期調査（排水管施設工事に伴う発掘調査）の南側を調査第１グループ井西貴子を担当者として実施し、整理作業は調査管理グループ山田隆一・井西を担当者として実施した。今回の調査で検出した遺構や遺物は、既往の調査成果と考え合わせ、雁屋遺跡を解明する上で貴重な資料を提供するものと思われます。

調査に際しご協力いただいた四條畷市教育委員会、府立四条畷高等学校並びに地元の方々をはじめとする関係各位に厚く感謝、御礼申し上げるとともに、今後とも文化財保護行政にいっそうのご理解ご協力をお願い申し上げます。



第１図　四条畷高等学校内調査地点概略図

1　調査経過

雁屋遺跡は、四條畷市雁屋北町、江瀬美町、美田町に所在し、遺跡の範囲は東西500m、南北800mと推定されている。四条畷高等学校内では、これまで５回の発掘調査が実施されている。

【1986年】　東館建設及び運動場内の排水管敷設工事。

弥生時代中期の方形周溝墓３基。弥生時代後期の大溝・土坑。奈良時代の河川などを検出。

註１　大阪府教育委員会 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』－四條畷市雁屋北町所在－

【1993年】　運動場内の排水管切替工事。幅１ｍのトレンチ調査。

弥生後期の溝３条。古墳時代の溝、奈良時代の自然河川などを検出。奈良時代の自然河川から人面墨書土器出土。

註２　大阪府教育委員会　1994『雁屋遺跡発掘調査概要』－大阪府立四条畷高等学校体育館撤去に伴う－

【1995年】　体育館建て替え工事。

弥生時代後期の竪穴住居。溝・土坑などを検出。シャーマンを線刻したと考えられる絵画土器が出土。

【1996・1997年】　新校舎（仮称理科棟）建設工事。

弥生時代中期の方形周溝墓・自然河川、弥生時代後期の溝・土坑。古墳時代～奈良時代の自然河川などを検出。

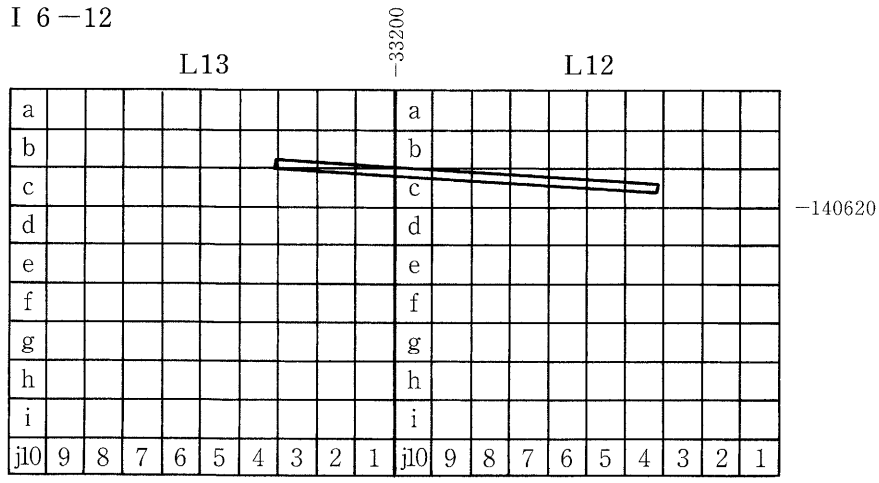
註３　大阪府教育委員会　1999『雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅳ』－府立四条畷高校理科棟（仮称）建築に伴う発掘調査－

2001年度の発掘調査は、下水道管移設工事に伴う発掘調査で、調査面積は267㎡である。調査期間は平成13年11月から平成14年３月まで実施した。

2　調査成果

Ⅰ　地区割り・調査の方法

調査区は、大阪府が採用している分類でＩ６－12－L12－ｃ９～４とＩ６－12－L13－ｂ・ｃ１～４に位置する。調査時における遺物の取り上げは、東西に長いトレンチの東端を起点として５ｍ間隔で基準杭を設置した。



第２図　調査区地区割り図

調査は、高等学校建設時の盛土と旧耕土・床土を機械で掘削し、以下中世耕作土・包含層・自然河川を人力掘削とした。

Ⅱ　遺構と遺物

①　基本層序

第１層（①）　高等学校建設時の盛土層。攪乱層。上面Ｔ.Ｐ.6.7m。層厚約１ｍ。

第２層（②・③）　旧耕作土・床土。上面Ｔ.Ｐ.6.4ｍ。耕作土は灰色土層を基本とし、床土は白灰色・黄白灰色土を呈する。旧耕土は、明治期学校創立以前の耕作土である。

第３層（⑥・⑦）　中世耕作土層。上面Ｔ.Ｐ.6.1～6.15m。上層（⑧）は10Ｙ６／２、下層は（⑨)10Ｙ５／２オリーブ灰色粘質土である。基本的には水平堆積であり、鉄分の沈着も見られる。瓦器・土師器・須恵器の細片が出土した。部分的ではあるが、上面に灰色細砂混土⑤が堆積する。この土層は洪水堆積に起因する土である。

第４層（⑧）　砂層　自然河川の最上層の堆積である。出土遺物から奈良時代以降の堆積と考えられる。上面Ｔ.Ｐ.5.9m。

第５層（⑩）　弥生時代包含層１　上面がＴ.Ｐ.5.7m。５Ｙ３／１オリーブ黒色粘土層。上面には足跡が検出されたが、土層は水平堆積ではなく、（調査区東側で層厚約15㎝を測るが、西側では薄くなり７区で消える。）河川の影響を受けた土層堆積で、岸部であろう。弥生時代の壺の体部片、高坏脚部等が出土した。

第６層（⑪）　弥生時代包含層２　上面がＴ.Ｐ.5.6m。５Ｙ３／１オリーブ黒色砂混土層。層厚約20㎝。遺物の出土量は少ないが、弥生時代の壺体部片が出土した。時期の詳細は不明である。

第７層（⑫）　地山層。Ｔ.Ｐ.5.4m。暗緑灰色砂混土層。

砂礫層　断面模式図でスクリーントーンで示している土層である。第５～７層が確認できる地区以外では、第３層以下全体に堆積する。土質はシルト～砂・礫層である。出土遺物は多く、弥生土器・土師器（古墳時代）・須恵器（古墳時代）が出土した。

②　遺構と遺物

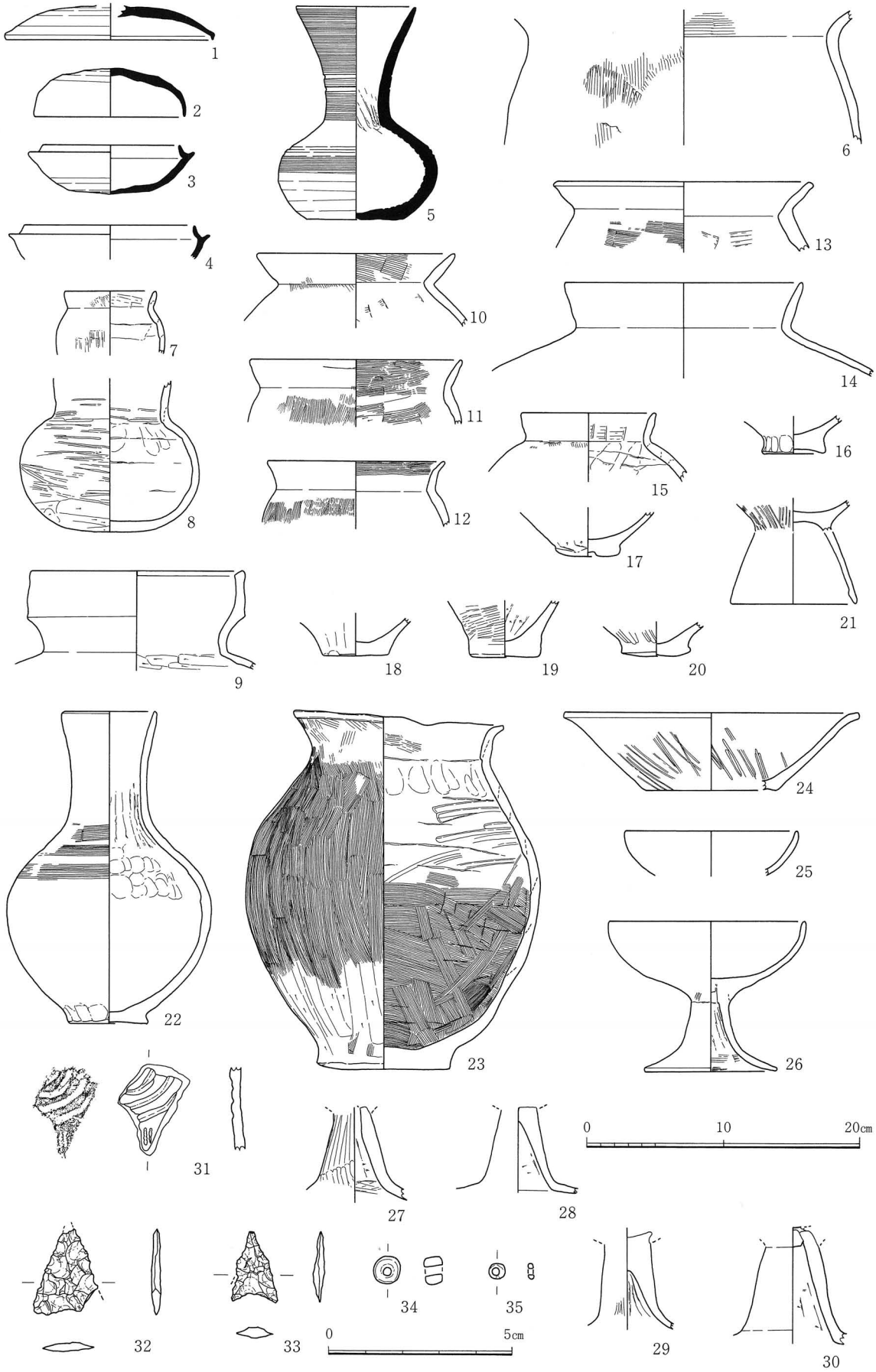
遺構面は、弥生時代の包含層（第６層⑩）上面を第１遺構面、第６層下層、第７層⑪上面を第２遺構面とした。第６・７層が確認できるのは６区と13・14区の間であり、7～12区と15区より西側は同位層として河川堆積上面を第１遺構面として認識した。第２面に相当する遺構面の広がりは認識できなかった。図示した遺構面は第１面であり、15～19区で検出されている遺構は、自然河川の中の流路の肩である。部分的にシルト層や粘質土層が堆積しており、流れの位置が変わっているものと思われる。大筋での自然河川の方向は北東から南西方向と考えられる。

また、第６～13区については中世の耕作土上面でも精査を行い遺構検出に努めたが、畦畔などの遺構は確認されなかった。

第3図　遺構全体図（S＝1／200）・南壁断面模式図（縦：1／40　横：1／200）

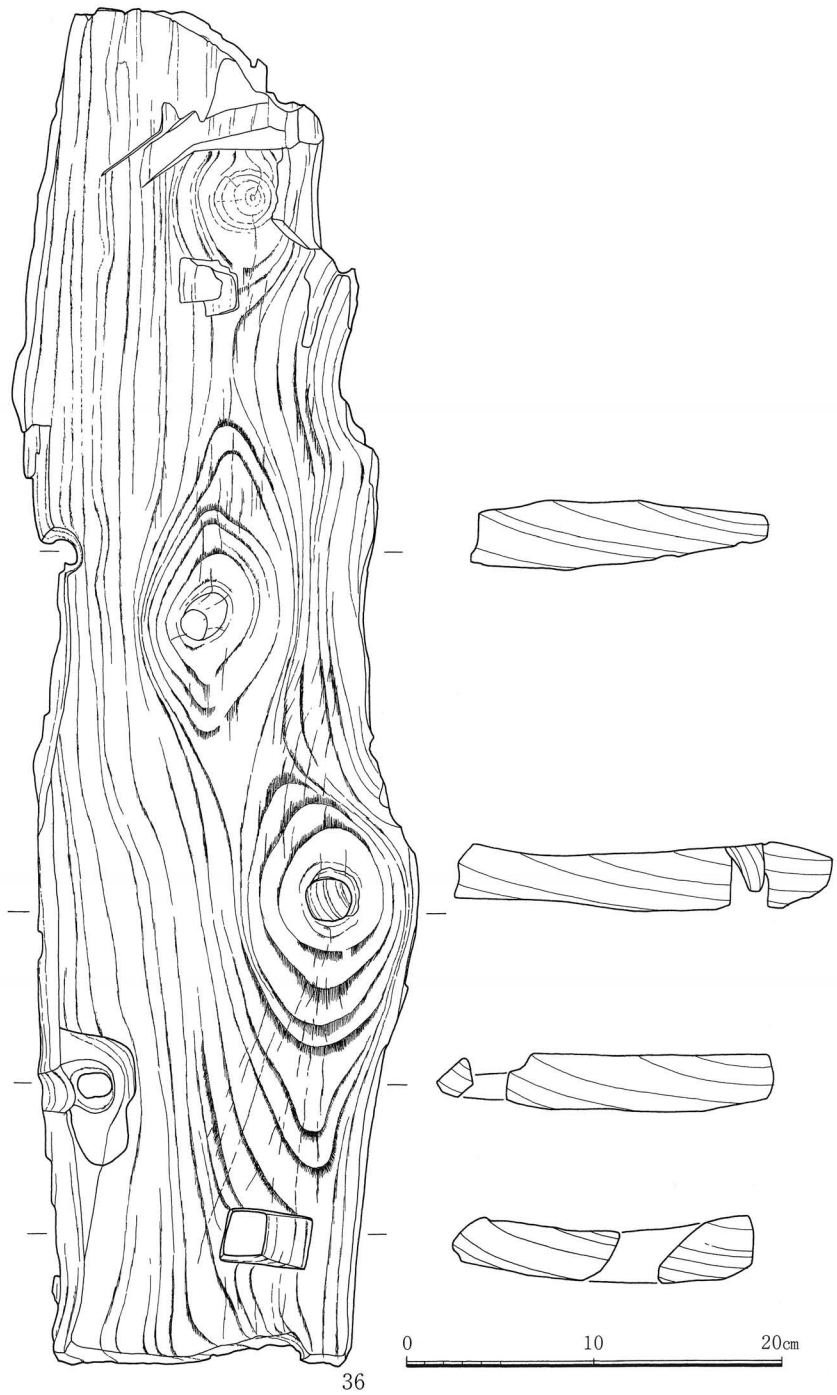
河川出土遺物

今回図化した遺物はいずれも自然河川出土である。1と6は第4層⑧、それ以外は下層出土である。1は陶邑編年第Ⅳ型式の須恵器杯蓋（奈良時代）、6は土師器の甕で、体部が長胴になると考えられ、7世紀代に属する。調整は口縁部外面ナデ、内面ハケメ、肩部外面ハケメ、内面ナデである。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土に多量の長石を含む。2は須恵器杯蓋、3・4は須恵器杯身、5は須恵器壺である。2～5は、陶邑編年第Ⅱ型式に属する。7は土師器小型壺である。調整は口縁部内面ナデ、外面ハケメ、体部内面ナデ、外面縦方向のハケメの後横方向のハケメが施されているようだが、摩耗が著しく図化できない。内面に粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察される。色調は黄灰色を呈し、胎土は長石粒などを含む。8は土師器の壺で、底部は平底である。調整は外面頸部ヘラミガキの後ナデ、体部上・中位横方向のヘラミガキ、下位から底部ヘラケズリ、内面頸部ハケメ、上位ユビナデ、中位から底部ナデである。色調はにぶい赤褐～橙色を呈し、胎土は長石・雲母・石英を含む。9は土師器の壺で、口縁部のみ残存。調整は口縁部内外面ともナデ、内面肩部ヘラケズリである。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は長石・クサリ礫を含む。10～21は甕である。16･17･19･20の時期は、弥生時代か古墳時代初頭か判別するのは難しい。共伴する遺物で見てみると、庄内期として位置づけられるものは、21の東海系の甕が考えられるが、庄内期でも新段階に属し、他の遺物は布留式期である。庄内期の古段階の遺物が確認されていないことから、今回は弥生土器として分類した。今後弥生時代終末期から庄内期古段階の遺物が検出されれば変更する必要がでてくるものと考えている。10の調整は口縁部内面ハケメ、外面ナデ、肩部内面木口ナデ、外面ハケメである。色調は灰白～浅橙色を呈し、胎土は長石・クサリ礫・雲母を含む。11の調整は口縁部内面ハケメ、外面ナデ、体部内面共ハケメである。色調はにぶい黄色を呈し、胎土は長石・雲母を含む。12の調整は口縁部内面ヨコナデの後上位ハケメ、外面ヨコナデ、肩部内面ナデ、外面ハケメである。色調は褐灰色から黄褐色を呈し、胎土は長石・雲母を含む。13の口縁端部は若干外側に肥厚する。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、肩部内外面ともハケメである。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は長石などを多く含む。14の調整は口縁部内外面ともヨコナデ、肩部内外面ともナデである。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は長石を含む。15の調整は口縁部内面ヨコナデの後ハケメ、外面ヨコナデ、肩部内面ユビナデ、外面ハケメである。色調は褐灰からにぶい橙色を呈し、胎土は長石他を含む。16の色調はにぶい橙色を呈し、胎土は長石・雲母を含む。17の色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は直径5㎜の小石、白・黒砂粒を含む。18の色調は明赤褐色を呈し、胎土は長石・雲母を含む。19の色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は長石を含む。20の色調は暗灰黄色を呈し、胎土は長石を含む。21は東海系S字口縁台付甕の底部である。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は長石・石英・雲母を多量に含む。22は弥生土器の壺で、自然河川下層（地区19）T.P.4.75mで検出した。残存率は40％で、口頸部から体部下半にかけては反転復元し図下している。調整は外面全体ナデ、底部ユビオサエ、内面頸部絞り目、肩部ユビオサエ、他はナデを施す。肩部に7本歯の櫛描き直線紋を3段に施す。



第４図　自然河川出土遺物

色調は灰黄褐色を呈し、胎土は長石・雲母・黒色砂粒を含む。時期は弥生時代中期に属する。23は弥生土器の甕で、自然河川下層（地区19）T.P.4.75mで検出した。残存率は85%である。遺構に伴う可能性を考え周辺をかなり精査したが、遺構はなく同一レベルで検出した壺22と時期的な差があるので自然流路の流れ込みと理解できる。調整は口縁部内外面ともハケメ、外面上から中位ハケメ、下位底部から上に向けてのヘラケズリ、内面肩部ユビオサエ、上半ナデ、下半ハケメである。色調はにぶい黄橙色、胎土は長石・雲母・石英を含む。時期は弥生時代後期に属する。24は土師器高杯の杯部で、調整は内面ともヨコナデの後ヘラミガキである。色調は黄橙色を呈し、長石・雲母を含む。25は土師器の鉢もしくは高杯の杯部で色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は長石・雲母を含む。26は土師器高杯である。調整は杯部内面ナデ、外面摩耗が著しく調整不明、脚部内面絞り目、裾部ハケメ、外面ナデである。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は長石・石英を含む。27～30は高杯の脚部である。27･29は、先述の甕底部同様共伴する多くの遺物の時期が庄内期新段階から布留式期であり、庄内期古段階の土器が確認できないことから、弥生土器として分類した。他は布留式期新段階である。27の色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は長石・石英・雲母を含む。28の色調は灰白色

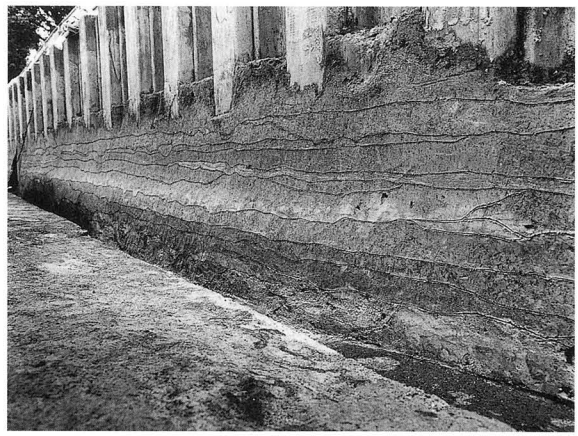


第５図　自然河川出土用途不明木製品

を呈し、胎土灰・白・黒色砂粒を含む。29の色調は浅黄橙色を呈し、胎土は白色砂粒を含む。30の色調は浅黄色を呈し、胎土は白・灰・黒色砂粒を含む。31は縄紋時代中期末の深鉢で、北白川C式である。破片の下位に縄紋が観察される。32・33は縄紋時代の石鏃、34・35は滑石製の臼玉である。36は用途不明の板材で、長辺142.2㎝、短辺42.9㎝、厚み7.2㎝である。方形の刳り抜きが1ヶ所、貫通しない切り込みが1ヶ所、円形の穿孔が2ヶ所にある。断面形はやや湾曲している。

3　おわりに

今回の調査区では、弥生時代から奈良時代の自然河川の一部と弥生時代の岸部が確認された。本調査区周辺（95年度調査区・86年度調査区）では弥生時代の方形周溝墓が検出されており、調査地周辺の弥生時代は、墓域であったことがわかっている。今回は調査面積が狭かったこともあり墓域の広がりは確認でなかった。奈良時代には、今回の調査区と93年度調査区で自然河川が検出された。流路内には弥生時代の遺物が包含されており、弥生時代の墓域を切って流れたものと考えられる。中世になると流路は埋まっており、耕作土が確認された。四条畷高等学校が建設される以前まで、耕作地として利用されていた。



第6図　南壁土層断面

報　告　書　抄　録

書　　名	雁屋遺跡発掘調査概要・V（かりやいせきはっくつちょうさがいようご）	
編著者名	井西　貴子	
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課	
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL　06(6941)0351	
発行年月日	西暦　2003年7月31日	
所収遺跡名	雁屋遺跡（かりやいせき）	
所在地	四條畷市雁屋北町（しじょうなわてしかりやきたまち）	
コード	市町村	27229
	遺跡番号	18
北　　緯	34°44′31″	
東　　経	135°38′22″	
調査期間	平成13年11月～平成14年3月	
調査面積	267㎡	
調査原因	下水道管移設工事	
種　　別	集落・墓域	
主な時代	弥生時代から中世	
主な遺構	自然河川	
主な遺物	弥生土器、古墳時代須恵器・土師器、木製品	

雁屋遺跡発掘調査概要・V

発行日　平成15年7月31日
発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06−6941−0351
印　刷　中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2−6−8

本書は300部作成し、一冊当たりの単価は294円である。